

選択がもたらす絶滅

リサーチの背景

かつて、恐竜は数百万年という歳月をかけて絶滅した。対して、現代はこの規模を超える大量絶滅期に突入しているという見解がある。生態系バランスに生じている広範囲で急速な変化は、私たちの暮らしに無関係とはいえないだろう。大量絶滅を招いた背景には、経済活動による環境負荷が影響しているのではないだろうか。

作成者: A.F

レポートに関する
お問い合わせ:
03-5542-5300
info@sfinder.com

絶滅危惧種のうなぎ



画像出典:写真AC

経済活動による生態系の変化

地球上では、年間4万種もの生物が絶滅している。また、日本でも4千種に近い生物が絶滅の恐れにある。1980年以来、農業生産拡大の代償は、原生林の破壊だった。生息地を奪われた生物は、行き場を失う。生物多様性が危機に瀕する最も大きな要因は、土地と海の利用である。

今、私たちの手にしているものが、生態系バランスを崩しているかもしれない。それに気付いているにも関わらず、社会は長きに渡って経済拡大を優先してきた。現在は改善している場合でも、過去の開発地が再利用されなかったり、過去の汚染が現在の生態系へ影響を与えつづける。環境に不適切な経済活動は、人にも例外なくその後数十年数百年先の暮らしを大きく変えてしまうのである。

油ヤシのプランテーション



画像出典:写真AC

農地開発される前の土地に元々生息していた動物たちは、生息地が奪われる。

多様性が与える豊かさ

人類が動植物や大気などの自然から得ているあらゆる便益は、「自然の寄与」として定義される(*1)。これには、栄養豊富な食物の提供、身体的・心理的経験、災害の吸収などが含まれる。例えば、食料やエネルギーは1970年代から世界的に増加傾向にある。一方、それによって大気や土壌の気候調節力が減少している。たとえ減少する寄与の代替物がつくられても、それは不完全であり全ての相関関係を満たすことはできないだろう。人類が豊かに生きていくには、生態系にとっても持続的な生活環境でなければならない。

(*1) IPBES(生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム)による

経済活動は止められない

生物多様性は、私たちの生活に恩恵を与える。対して経済活動も私たちが生活をする上で欠かせないが、それによる環境負荷で生態系バランスに影響が出ているのもまた事実である。では、どのように両立を目指すべきか。

ESG要素は、投資判断だけでなく資金調達の見点から重要度が増している。資金調達無くして、企業が発展を続けることはできないだろう。まず、事業活動の中で行われる運送や調達、移動、廃棄物処理などの過程で、生態系への影響を知ることである。これらを環境に配慮して効率化することは、経済性を伴って持続的な両立となる。

補足：自然の寄与18項目のうち14項目が減少傾向

自然の寄与 (NCP)	過去50年の世界の傾向	地域ごとの傾向の一致	選ばれた指標
1 生息地の創出と維持	↓	○	・適切な生息地の面積 ・生物多様性の完全度
2 花粉媒介と種子や繁殖体の散布	↓	○	・花粉媒介生物の多様性 ・農地にある自然生息地の面積
3 大気質の調節	↘	↕	・生態系による大気汚染物質の貯留量と排出防止量
4 気候の調節	↘	↕	・生態系による温室効果ガスの排出削減と貯留量
5 海洋酸性化の調節	→	↕	・海洋環境、陸域環境による炭素貯留量
6 淡水の量、位置とタイミングの調節	↘	↕	・生態系が大気水、地表水、地下水の分配に与える影響
7 淡水と海水の水質の調節	↘	○	・水の成分をろ過または付加する生態系の面積
8 土壌と堆積物の形成、保護と浄化	↘	↕	・土壌有機炭素量
9 災害と極端現象の調節	↘	↕	・災害を吸収、緩衝する生態系の能力
10 有害な生物や生物学的プロセスの調節	↓	○	・農地にある自然生息地の面積 ・感染症媒介生物の多様性
11 エネルギー	↘	↕	・農地面積—バイオエネルギー生産に利用できる土地 ・森林面積
12 食料と飼料	↘	↕	・農地面積—食料と飼料の生産に利用できる土地 ・海洋漁業資源量
13 物資と支援 ⁷	↘	↕	・農地面積—物資の生産に利用できる土地 ・森林面積
14 薬用、生物化学、遺伝資源	↓	○	・地域で知られ、使われている薬用の生物種の割合 ・系統学的多様性
15 学習と発想 (インスピレーション)	↓	○	・自然の近くに住む人々の数 ・学習材料となる生命の多様性
16 身体的、心理的経験	↘	○	・自然または伝統的なランドスケープとシーンスケープの面積
17 アイデンティティの拠り所	↓	○	・土地利用と土地被覆の安定性
18 選択肢の維持	↓	○	・種の生存可能性 ・系統学的多様性

傾向の方向性 世界の傾向 ↓ ↘ ↙ ↗ ↖ ↕ ↑

地域ごとの傾向 ○ 一致 ↕ 異なる

信頼度 ● 十分確立 ● 確立しているが不完全 ● 競合する解釈あり

関連関係をもつ自然の寄与



画像出典：写真AC

自然からの恩恵は持続的で多面的だが、人工的な代替物のメリットは画一的であることが多い。

例えば、マングローブ林には侵食防止効果がある。伐採によって沿岸域に浸水被害が問題視された場合には、再生ではなく堤防で被害軽減が図られる。しかし、マングローブ林の能力は、これに限らない。カニや魚などの生息地となり、水質・土壌の調節能力も備わっている。堤防のような人工インフラでは全てを担うことはできず、整備や管理に莫大な費用も要するのである。

出典：IPBES, 地球規模評価報告書「良質な生活への寄与を維持する自然の容量(キャパシティ)の1970年代以降の世界的傾向」

参照・引用資料

- ▶WWFジャパン,「絶滅とは？その歴史と現在」, <https://www.wwf.or.jp/activities/opinion/69.html>, (2020年6月10日参照)
- ▶BBCニュース,「人類のせいで「動植物100万種が絶滅危機」=国連主催会合」, <https://www.bbc.com/japanese/48182496>, (2020年6月17日参照)
- ▶CNNニュース,「第6の絶滅期、予想より早く到来か「原因」は人類の活動」, <https://www.cnn.co.jp/fringe/35154679.html>, (2020年6月10日参照)
- ▶生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学—政策プラットフォーム,「地球規模評価報告書」, 2019年, https://www.iges.or.jp/jp/publication_documents/pub/translation/jp/10574/IPBESGlobalAssessmentSPM_j.pdf, (2020年8月13日参照)

本レポートに掲載された内容は作成日における情報に基づくものであり、予告なしに変更される場合があります。本レポートに掲載された情報の正確性・信頼性・完全性・妥当性・適合性について、いかなる表明・保証をするものではなく、一切の責任又は義務を負わないものとします。株式会社サティスファクトリーは、本レポートの配信に関して閲覧した方が本レポートを利用したこと又は本レポートに依拠したことによる直接・間接の損失や逸失利益及び損害を含むいかなる結果についても責任を負いません。また、本件に関する知的所有権は株式会社サティスファクトリーに帰属し、許可なく複製、転写、引用等を行うことを禁じます。